

<論文>

英語教育における辞書の活用  
—新学習指導要領に対応して—

高橋 渉, 酒井 英樹, 田中 江扶, 金子 史彦, 田中 真由美 信州大学学術研究院教育学系  
Colleen Dalton 信州大学全学教育機構  
津金 俊文 信州大学教育学部附属松本中学校  
小泉 一輝 長野市立若穂中学校  
戸谷 裕美子 長野市立北部中学校 他<sup>1</sup>

Teaching How to Use Dictionaries in English Lessons as a  
Response to the Implementation of a New Course of Study

Wataru Takahashi, Hideki Sakai, Kousuke Tanaka, Fumihiko Kaneko, Mayumi  
Tanaka: Academic Assembly, Shinshu University  
Colleen Dalton: School of General Education  
Toshifumi Tsugane: Junior High School, at Matsumoyo, Shinshu University  
Kazuki Koizumi: Wakaho Junior High School  
Yumiko Toda: Hokubu Junior High School The Others

English Education Team of the Joint Research Project  
of the Faculty of Education and Its Attached Schools, Shinshu University

This study discussed how to teach using dictionary in English classes in junior high schools. It is also a response to the implementation of a new Course of Study. This article consists of two parts. The first part is a study of the usage of dictionaries from the viewpoints of English language teaching methodology and English linguistics, done by the teachers of the Faculty of Education Shinshu University. The other is a report on the research carried out in English classes, mainly done by the teachers of the attached schools.

【キーワード】 辞書指導 英語教育 アンケート調査 英和辞書 和英辞書

1. はじめに

本研究は、中学校の英語授業における辞書指導のあり方を検討しようとするものである。辞書指導について、平成10年告示の中学校学習指導要領では「辞書の初歩的な使い方に慣れ、必要に応じて活用できるようにすること」と書かれていたが、平成20年告示の中学校学習指導要領では「辞書の使い方に慣れ、活用できるようにすること」とされ、「初歩的な」と「必要に応じて」が削除された。『中学校学習指導要領解説・外国語編』（文部科

学省,2008)では、「辞書を活用できることは必要不可欠である」(p.49)と述べられており、さらに「3学年間を通して適宜辞書を活用させることが大切である」(p.50)とされている。

本研究は、平成23年度からの3年間、信州大学教育学部の学部・附属共同研究の英語部門が辞書指導をテーマに追究してきたことの報告である。学部教員は、英和・和英辞書の活用について英語教育学・英語学の観点から理論的研究を進めた。また、中学生と大学生を対象に辞書使用に関するアンケート調査を実施した。さらに、附属教員は、中学1年から3年までの授業の中で実践事例を蓄積した。この研究を踏まえて、辞書指導のあり方を提案するものである。<sup>2</sup>

## 2. 英語教育学と英語学の観点から見る辞書指導

### 2.1 英語教育学からの辞書指導に関する提案

#### (1) 辞書指導の3つの段階

辞書の指導に関して Harmer(2007,p.241)は3つの段階を提案している。第1段階では、辞書が言語学習にいかに関与するか説明するだけでなく、語の意味に関する生徒からの答えにくい質問に対して、実際に教師が辞書で調べている姿を示す。第2段階では、生徒が辞書の収録語に関する情報を読み、理解できるよう訓練する。日本人学習者向けに編纂された英語学習用の辞書には、その辞書の使い方を学ぶための活用問題集やハンドブックが付属していることがある。そのような教材を使用して、生徒は見出し語とその語義以外の情報も学ぶことができる。第3段階では、辞書の使用が授業の流れの中に組み込まれる。例えば、各単元の導入では、新出語句に関する問題を辞書を使ってペアで解かせることによって、生徒自身が“agency”(主体性)を持って学習に取り組むこととなる(2007,p.245)。

#### (2) 辞書を使用する時・しない時

上記のような辞書の使用方法に関する指導もあるが、いつ辞書を使用するかに関しても指導が必要である。Harmer(2007,p.246)は、文章の大意を把握するためのリーディングなどの辞書を引かない活動では、その目的を教師が生徒に伝えることが重要であるとする一方で、一字一句の意味を知りたいがる生徒に対して共感する心を持ち、教師と生徒の間で辞書をいつ使用すべきか合意に達するための“bargain”(交渉)をすることも大切であると述べている。

多読の指導を行う際も同様の指導が必要である。多読では自分の英語力に合った本を辞書を使用せずにたくさん読むことが推奨されているため、辞書を引きたがる生徒に対して活動の目的を伝えることが重要である。それでも辞書を引きたがる場合は、教師と生徒の間で bargain を行い、辞書を引かないことをルールとする多読であっても、辞書を引ける場合や引くタイミングを共に決める。また、どうしても意味を知りたいと思う語句に印をつけて読書後に調べることを許可することも一つの方法であるが、磐崎(2011,5章4節)は、意味のわからない語句を後で調べるのではなく、辞書を引かなくても意味を推測することのできた表現のうち、使用方法に関して「なるほど」と感心できた表現にのみ印をつけて、

一冊読破した後に辞書で意味を確認することを提案している。

以上のように、辞書を使用する時としない時に関して生徒と話し合う機会を適宜設けながら、学習者が適切なタイミングで辞書を活用できるように指導することが望ましいと考える。

## 2.2 英語学からの辞書指導に関する提案

本節では、prototype(プロトタイプ)という観点から、辞書指導を考察する。まず、語の「定義」について考えてみる。例えば、「恋」と「愛」はどう違うのだろうか。我々は「恋」や「愛」という語の意味を理解して使っているというよりも、「恋」や「愛」であるかないかの「基準」に基づいて使っているといえる。この「基準」というのは典型的だとみなされるもの、つまり、プロトタイプのことである。辞書の語の定義には、このプロトタイプが使われている。例えば、「羽があって、飛べる」という典型的な特徴が「鳥」の定義になる。しかし、あくまで典型例であるため、ダチョウのように飛べないものも「鳥」として捉えられる(野矢,2011)。また、smoke や paint のように典型例(「タバコを吸う」や「絵を描く」)が特定しやすいものと、rule や educate のように、どの行為が「支配する」や「教育する」の典型例であるかが特定しにくいものがある(Vendler,1957)。

辞書の定義は典型例であるため、全体を捉えてはいない。例えば、「割る」という語は「ものに力を加え、2つ以上の部分に分ける」と定義されているが、「割る」は「枝」のような細長いものや「紙」のように厚みのないものには使われない(仁田,2002)。つまり、どのように使われているかをみることで、語の理解につながることになる。さらに、辞書の定義は典型例であるため、場合によっては個人差も出てくる。例えば、「豆腐」のように柔らかいものに「割る」が使えるかは、判断が分かれるところである。同じことが英語にも当てはまる。例えば、slip と skid はともに「すべる」を意味するが、車のようなタイヤがある乗り物には skid が使われる。そのため、My car slipped on some ice とは言わない(Webb,2006,p.34)。つまり、slip とは異なり、skid の典型例はタイヤのある乗り物がすべることである(道路の路面がすべりやすいことは skiddy であって slippery ではない)。しかし、辞書の定義は典型例であるため、英語母語話者の間でも判断が揺れる。Google でイギリスのサイトを検索すると、My car skidded のヒット数が 24,400 件に対して、My car slipped も 7,790 件ある(語の使用のコーパス分析に関しては、佐久間 2013)。しかしながら、My car skidded が教えるべき典型例であると考えられる。その理由として、(i)車に対しては slip よりも skid を使う人の方が多い、(ii)英和辞典の中には slip の主語に車を認めているものもあるが、(筆者が調べた範囲では)英英辞典では slip の主語に車は認めていない。

以上のことから、辞書指導においては、語の意味(= 定義)はあくまで目安(= 典型例)と捉え、多くの例文にふれることが、語の習得につながるといえる。さらに、判断が揺れる場合は、典型例を教えておくことが重要であると考えられる。

## 3. 辞書活用に関するアンケート調査の実施

実際に英語学習者は辞書をどのように活用しているのだろうか。本節では、中学1年生と大学生を対象に行ったアンケート調査の結果を報告する。

### 3.1 中学生調査

附属松本中学校1年生3クラス(117人)を対象に、辞書活用及び辞書指導に関するアンケート調査を行った。実施時期は、2012年2月であった。質問項目と結果は以下の通りである。回答は最初の3問は複数回答可であり、4問目は単一回答を求めた。

#### (1) 「今までに英語の単語や文章を調べる際に、辞書を使ったことがあるかどうか」

生徒全員が持っている教科書のワードリストの使用が最も多く(35%)、続いて学校でも購入を勧めた紙の辞書の使用が多かった(31%)。電子辞書(22%)については、生徒自身を持っていなくても親や兄弟から借りたと考えられる。また、インターネットのオンライン辞書の使用(10%)も見られた。上位3つの全部またはどれか2つを回答してくる生徒がとても多かった。

#### (2) 「ふだん辞書を使っているかどうか」

「時々使っている」という回答が63%で一番となった。「あまり使っていない」(18%)と「いつも使っている」(14%)が続いた。また、「全然使わない」という回答が6%あった。「時々使っている」という回答が最も多かった理由として、教科書の新出語句の意味を調べたり、趣味等で出会った英語を調べたりするのが「時々」であるからと考えられる。授業で書く・話すという活動を行っていても、毎回は辞書活用をしておらず、家庭学習(提出ノート)では既習の英文の写しや問題を解くことが多く、辞書を常には必要としないことも理由として考えられる。

#### (3) 「どのような時に英語の辞書を使うか」

(2)で「全然使わない」以外の回答をした生徒に対して回答を求めた。「学校の宿題」が35%で最上位であった。続いて、「塾の宿題をしていて」(22%)、「英検の勉強をしていて」(20%)というように、自分の英語の力をつけるための使用が続いた。さらに、「音楽を聴いていて」(11%)や「パソコンを使っていて」(6%)、「英字新聞を読んでいて」(1%)のように趣味に関する使用と、「その他」の使用(8%)があった。多くの生徒が「単語の意味がわからない」と共通して感じるのが、学校の授業の時である。続いて、塾の宿題、英検と続き、単語の意味を知る必要性から辞書を引くと考えられる。音楽・パソコン等と趣味は様々だが、自分が興味を持ったものについて知りたいという気持ちから辞書を使用する場合もあることがわかる。

#### (4) 「特にどのような辞書を使用しているか」

(2)で「全然使わない」以外の回答をした生徒に対して回答を求めた。この質問のみ、単一回答を求めた。結果は、「教科書のワードリスト」(30%)、「英語の紙の辞書」(31%)、「電子辞書」(30%)の3つが並んだ。「インターネットのオンライン辞書」は9%であった。

#### (5) 3種類の辞書の使用に対する生徒の意見

最後に、3種類(教科書のワードリスト、英語の紙の辞書、電子辞書)の使用に関する意見

を自由回答してもらった。表1は、回答をまとめたものである。

表1 3種類の辞書使用に関する意見

	使っていて良いと感じる点	使っていて難しいと感じる点
教科書のワードリスト	教科書についているのでパッと見られる／教科書の内容でしか使わないので探しやすい／(教科書準拠の)フラッシュカードと中身が同じでいい	教科書で使われている以外の意味がわからない／綴りがわからない時に調べられない／熟語の一部としてしか出てこず、単語の単独での意味がわからない／和英がない
英語の紙の辞書	他の活用方法もわかる／文字が書ける／調べて身に付く	調べるのに時間がかかる／重い
電子辞書	文字を打つだけで簡単に調べられるところ／複数の辞書が入っていて、いろいろな辞書で意味を調べられる／音声が開ける／コンパクト	訳がたくさん出てきて、どの訳があっているかわからない時がある／いろいろ出てきすぎてよくわからないところ／壊れやすい／長文が出てこない／例文がすぐに見られない

### 3.2 大学生調査

2014年1月、三つの「アカデミック・イングリッシュ」(高年時必修の一般教養英語)のクラスにおいて82名の大学二年生を対象に、三つのレベル:彼らの中学校時、高等学校時、及び現在の英語学習における辞書活用についての調査を行った。調査対象者のより詳細な内訳は二つの上級クラスに属する56名と一つの中級クラスに属する26名であり、82名全員が教育学部の学生であるが専攻は様々である。この調査の目的は、それまでの辞書指導が、大学生の辞書使用にどのような傾向を生み出すのかを明らかにすることである。

調査の最初の部分はそれぞれのレベルでの辞書使用に関する四つの質問から成っている。第一の質問は(表2を参照)、どの種の辞書を使用しているかというものであり、学生は一つ以上の答えを選択できる。結果として、中学校時には85%が英語の紙の辞書を使用し、54%が教科書のワードリストを使用したと返答した。対照的に高校生時には84%が電子辞書を使用し、たった45%が英語の紙の辞書を使用すると返答した。似たように現在は83%が電子辞書を使用するが、48%がインターネットのオンライン辞書を使用するとの返答であった。

表2 校種ごとの使用辞書の種類の割合

	中学校	高校	大学
ワードリスト	54%	16%	1%
紙	85%	45%	7%
電子	13%	84%	83%
オンライン	2%	6%	48%
その他	—	—	2%
使用せず	1%	—	2%

表3 校種ごとの辞書使用の頻度の割合

	中学校	高校	大学
しばしば	35%	77%	20%
時々	50%	21%	54%
おりおり	13%	2%	24%
使用しない	1%	—	2%

第二の質問は(表3を参照)、辞書使用の頻度についてである。中学校時には35%が“しばしば”辞書を使用した高校時には77%が“しばしば”使用したのに対し、現在大学生としては20%のみが“しばしば”使用するとの結果であった。高校生はより難易度の高い英文を読む必要があり、また大学入学試験に合格する必要があることから、この結果は驚くものでない。

第三の質問は(表 4 を参照), 辞書使用の目的についてであり, 学生は一つ以上の答えを選択できる. 最も多かった答えは三つのレベルに共通したものだ: 彼らは宿題のために辞書を使用する(中学 - 91%, 高校 - 94%, 大学 - 88%). 二番目に多かった答えに関しても同様であった: 試験のために使用するのであり, 高校生が最も高い 49%を記録した. 注目すべき相違点は, 20%の大学生がウェブページの情報を理解するために辞書を使用するのに対して, 同様の目的での辞書使用は中学生時は 1%, 高校生時は 6%であることである.

表 4 校種ごとの辞書使用の目的の割合

	中学校	高校	大学
英語の宿題	91%	94%	88%
試験勉強	43%	49%	32%
塾/他の学科	18%	15%	21%
歌詞の意味	13%	18%	18%
ウェブページ	1%	6%	20%
その他	1%	1%	1%

表 5 校種ごとの最もよく使用する種類の辞書の割合

	中学校	高校	大学
ワードリスト	29%	—	—
紙	61%	21%	4%
電子	7%	78%	71%
オンライン	—	—	21%
その他	—	—	—
使用せず	2%	1%	4%

最後の質問は(表 5 を参照), どの種の辞書を最もよく使用しているかというものであり, 第一の質問と異なり学生は一つの答えしか選択できない. 予想通り, 中学生時には 61%が英語の紙の辞書を最もよく使用し, 一方高校生時には 78%が, 現在では 71%が電子辞書を最もよく使用するとの返答であった. 注目に値することは, 中学校時及び高校時にはゼロにも関わらず現在は 21%がインターネットのオンライン辞書を最もよく使用すると答えていることである. 大学生は学業にも娯楽にもオンラインで過ごす時間が増えるため, インターネットのオンライン辞書の使用も増えるのは当然と言えよう.

調査の第二の部分は辞書使用の指導とその難しさに関する質問に焦点を当てている. 今までに辞書の使い方について教わったことがあるか, と尋ねられた場合, 79%があると答え 18%がないと答えた. あると答えたうちの 78%が中学校教員に, 46%が高校教員に, 9%が塾で, そして 8%が親から教わったという. 辞書使用の難易度に関する選択肢の用意された質問に答えた 80 名の学生のうち, 9%がよく困難を感じ, 48%が時々困難を感じ, たった 11%だけが一般的に困難を感じることはないという. 最後の質問は辞書使用に際しての困難について自由記述するものである. 多くの学生が多くの中から適切な意味を選ぶのが困難である, 例文が質量とも不足気味である, イディオムや口語体や新しい造語を見つけるのが困難であるなどと述べている.

### 3.3 中学生調査と大学生調査の考察

大学二年生の調査は彼らが英語の紙の辞書から離れインターネットのオンライン辞書へと向かっているという動向を明確に示している. これは学年が上がったこととテクノロジーの進歩の結果であろう. 2013 年に中学一年生を対象に行われた調査では, 30%が電子辞書を使用し 9%がインターネットのオンライン辞書を使用している. これらの数字はそれぞれ 7%と 0%という, 現在の大学生が中学生時にそれらを使用したそれを大きく上回っている.

調査の対象となった大学生たちは、彼らが英語の紙の辞書を使用していた中学生時に最も多く辞書使用の指導を受けている。大学での辞書使用の指導についてレポートしたものはないが、大学生の辞書使用は急速に電子辞書及びインターネットのオンライン辞書へとシフトしている。これらの辞書は学生が適切な語句や使用法を探す際に生じる困難に、新しくより適切な方法をもって応えるものである。辞書使用は言語学習に欠かせないものであり、低学年での辞書使用の指導は辞書使用の昨今の動向を気に留めて行われるべきであり、生徒が英語を学び続けることに役立つ技能を身に付けさせる助けとなるべきである。

#### 4. 辞書指導の工夫

本節では、平成28年度に附属長野中学校で実施した辞書指導に関する実践を報告する。

##### 4.1 実践事例1

実践対象学年は1年生で、実践時期は1月であった。実践単元は、Lesson 9 “A Letter from the UK” (*New Crown English Series 1*) である。

##### (1) 言語活動

教科書にある、イングランドからの手紙の内容を読み取った後、ALT の書いた手紙の内容を読み取る場面で、その本文に書かれていることばかりでなく、単語の持つ多様な意味や文のつながりなどから、行間を読み、書き手が伝えようとしていることを理解する。その後、読み取った書き手の意図することに合うように、手紙の返事を書く。

##### (2) 辞書指導

単元を通して、学習の段階を、3段階(①教科書の内容を読み取る場面、② ALT の手紙を読み取る場面、③ ALT に手紙の返事を書く場面)に分けて、生徒の辞書の使用について観察及び分析を行った。

##### (3) 実践結果

###### ① 教科書の内容を読み取る場面

特に辞書を活用するように指示をしたわけではないが、単語の意味を調べるために辞書を使用し、本文の意味を理解するために使用している姿が見られた。代表的な意味を選択し、単語ごとに日本語での意味を確認して、最後に日本語としてつなげる作業を繰り返していることが見えてきた。その中で、既習表現であるにもかかわらず、多くの生徒が引く単語(覚えにくいと推測される)があることが見えてきた。また、中学生用の英和辞書の頁の両側にアルファベットだけでなく冒頭の単語と最後の単語が書いてあることから、机間指導をしながら、生徒がどの単語を調べているのかを目視しやすいことがわかった。

###### ② ALT の手紙を読み取る場面

ALT によって書かれた手紙には、未習語が含まれていた。生徒は未習語に遭遇した際に、文全体の意味を理解するために辞書を使用していた。しかし、上記①のように、ある単語と一つの日本語の意味とを結びつける作業に終始してしまっているため、適切な日本語の意味を理解できずにとまどっている姿も見られた。

### ③ ALT に手紙の返事を書く場面

自分の考えたことを英語にする場面では、和英辞書の使用にとどまり、英和辞書を活用する姿は見られなかった。

1年生の学習の中では、英和辞書を使用はしているものの、活用し切れていない様子が見られた。どのようなタイプの辞書を、どのような場面で使用させていくかについて課題が残った。

#### 4.2 実践事例2

実践対象学年は2年生(授業実践者の担当学級2クラス81名)で、実践時期は12月から1月であった。実践単元は、Lesson8 “Landmines and Children” (*New Crown English Series 2*) であった。

##### (1) 言語活動

教科書からカンボジアの現状や地雷の恐ろしさを読み取る。また、戦争や地雷に関するVTRや補助資料から情報を読み取った上で、自分が考えたことをレポートとして英語で書く。また、その過程で、互いの意見を発表し合う場面を設定し、英語を通して互いの考えを理解する。

##### (2) 辞書指導

事例1の1年生と同様に、単元展開の中を3段階(①教科書や補助資料等からカンボジアの現状について読み取る場面、②友と互いの考えを共有する場面、③自分の考えをレポートとしてまとめる場面)に分けて、生徒の辞書の使用について観察及び分析を行った。

①の段階では、まず、意味が分からない単語に○を付け、課題を明らかにしてから辞書をひくように指導した。辞書をひいた際には、マーカーで単語に印を付け、主要な意味をノートに書き写すようにした。

②の場面では、互いに分からない単語が出てきた場合には教え合うように指示し、その際に、自分が調べた単語の多様な意味や辞書の中での表記も併せて共有するようにした。

③の場面では、まとめたレポートに注を付けるように指示し、辞書で調べた単語やその意味を明らかにするように指導した。

##### (3) 実践結果

###### ① 教科書や補助資料等からカンボジアの現状について読み取る場面

意味が定着していない既習表現や未習語が出てきた際に英和辞書を活用する姿は1年生と同様であった。しかし、1つの単語に対して複数ある意味の中から、その文の中で使用される場合にはどの意味を当てはめるのが適切か、文全体の意味から考え、取捨選択して意味を絞っていく姿があった。

###### ② 友と互いの考えを共有する場面

互いの考えを発表し合う場面では、辞書使用の必要性が生まれるように、黒板への板書やワークシートへの書き込みなど、意図的に考えた英文を文字化して伝え合うようにした。当然、自分の考えを書く際には和英辞書を使用して考えをまとめているため、他の生徒に

とつての未習語が使われる場合が多かった。未習語の意味を確認の上、上記①と同様に、前後の関連から適切な意味を選び出す姿が見られた。

### ③自分の考えをレポートとしてまとめる場面

マッピングやスモールトークなどを積み重ねた後のレポート作成であったため、それまでに和英辞書を使って書きためてあった英文をつなぎ合わせていく姿が多かった。一部の生徒は、未習語を使用しながらも読み手の立場に立ち、わかりづらいつと判断した場合には、英和辞書を使用する姿が見られた。英和辞書の中にある例文を使い、その単語の意味を読み手が理解できるように工夫する姿が見られた。

## 4.3 実践事例に関する考察

実践事例 1 より、どのような辞書(学習者用辞書、電子辞書、一般向け辞書)を用いるのかを検討する必要があることが示唆された。また、教科書巻末にある「単語の意味」のページと異なり、英和辞書の場合 1 つの単語が持つ複数の意味が列挙されているため、1 年生に英和辞書を使用させる際には意味の候補から文脈に合う適切な意味を選択する方法の指導などが必要であることも示唆された。実践事例 2 より、単語の意味を調べるだけでなく、語形変化や例文の使用など、生徒に教えるべき辞書の効果的な使用方法を検討する必要性が示された。

## 5. 辞書指導に関する提案

### 5.1 未習語の意味の推測

本稿 4.3 の実践事例に関する考察では、実践事例 1 から文脈上適切な語の意味を英和辞書から選択する方法を指導することが必要であると示唆されている。本稿 3.2 の大学生への辞書使用に関するアンケート調査からも、辞書を引く際に適切な意味を辞書から見つけることが難しいと感じる学生が多いことがわかった。本稿 2.1 で述べたとおり、多読では、辞書は引かないことが推奨されているが、磐崎(2011, 5 章 4 節)は意味を推測し、その使用方法に関して納得できた表現だけを一冊読み終わった後に辞書で確認するという方法を提案している。中学校ではあまり多読は行われていないが、未知語をすぐに辞書で調べるのではなく、意味を推測した上で適切な意味を確認するという習慣を身につけさせることで、より速く、あるいはより多く英文を読む力を養うのに役立つと考えられる。

### 5.2 例文に注目させる辞書の指導

実践事例 2 の考察からは、語の意味に加え、例文などを活用する方法の検討が必要であると示唆されている。本稿 2.2 で述べられているとおり、語の典型例を理解しておくことは必要であるが、典型例だけでは語の適切な選択が難しい場合もあるため、多くの例文にふれることが重要である。しかし、本稿 3.2 の大学生への辞書使用に関するアンケート調査の回答から辞書における例文の量の不足が指摘されている。紙幅の都合上、英語の紙の辞書や教科書のワードリストに多量の例文を載せることはできないが、オンラインの辞書や複数の英語の辞書がコンテンツとして入っている電子辞書からは多くの例文を検索する

ことができる。本稿 3.1 の中学生への辞書使用に関するアンケート調査では、電子辞書とオンライン辞書の使用者はあわせて 32% であり、今後、さらに多くの中学生が電子媒体の辞書を使用すると考えられる。その使用方法についての指導として、まずは、本稿 2.1 の(1)で提案されている辞書指導の第 1 段階や第 2 段階のように、教師が例文を活用して語の選択に役立てている様子を示したり、生徒に例文を探させたり、例文から語の使用方法を考えさせたりする活動が考えられる。

## 6. おわりに

本研究は新学習指導要領に対応して主として中学校での辞書指導はどうあるべきかを検討してきた。新学習指導要領では旧学習指導要領にあった「初歩的な」と「必要に応じて」という表現が辞書のあり方に関する記述から削除された。本稿では辞書を直ぐに使わずに未習語の意味を推測させることや、例文の活用、電子辞書・インターネットのオンライン辞書の使用の指導を主張してきた。このような辞書は英語の紙の辞書では不足しがちな豊富な例文等の情報を得ることや、このような辞書の活用は推測力を身に付けることによってより効果的に使いこなすことを可能にするため中学校卒業後、より高度な英文を読む際にはかならず必要になることであり、実際現在の大学生の間ではそういった辞書の使用頻度が高いことがわかった。中学校での辞書指導も、中学校三年間だけでなくその後も視野に入れたものが望まれる。

## 注

- 1.各メンバーが関わった年度は、高橋渉、酒井英樹、田中江扶、金子史彦、田中真由美(25年度)、伊原巧(23年度)、Colleen Dalton(25年度)、小泉一輝(23・25年度)、三澤葵(23年度)、倉島小有美(23年度)、百瀬一紀(23年度)、矢野司(24・25年度)、橋爪祐一(24・25年度)、木下耕一(25年度)、坂口俊樹(25年度)、矢島裕文(25年度)、戸谷裕美子(23・24年度)、津金俊文(24・25年度)、楠武明(24年度)、鷲澤貴夫(25年度)である。
- 2.主たる執筆担当者は、1(酒井)、2.1(田中真由美)、2.2(田中江扶)、3.1(24年度附属松本中学校)、3.2(Dalton)、4(23年度附属長野中学校)、5.1-2(田中真由美)、6(金子)。また、本稿執筆のとりまとめと英文要旨、3.2の和訳を金子が担当。

## 文献

- Harmer, J., 2007, *The Practice of English Language Teaching* (4th ed), Pearson Education, Harlow, UK
- 磐崎弘貞, 2011, 英語辞書をフル活用する 7つの鉄則, 大修館書店, 東京
- 文部科学省, 2008, 中学校学習指導要領解説・外国語編, 開隆堂, 東京
- 野矢茂樹, 2011, 語りえぬものを語る, 講談社, 東京
- 仁田義雄, 2002, 辞書には書かれていないことばの話, 岩波書店, 東京
- 佐久間治, 2013, ネイティブが使う英語・避ける英語, 研究社, 東京
- 関山健治, 2007, 辞書からはじめる英語学習, 小学館, 東京
- Vendler, Z., 1957, Verbs and Times, *The Philosophical Review*, 56, pp.143-160
- Webb, J., 2006, 日本人に共通する英語のミス 151, *The Japan Times*, 東京

(2014年5月22日 受付) (2014年11月7日 受理)